

釈尊の縁起の説法の真意について

鉾之原 善 章

About the true intention of the preaching
by Sakyamuni about "paṭiccasamuppāda"

Yoshinori Hokonohara

This paper is investigating the real meaning of the preaching by Sakyamuni about "paṭiccasamuppāda" which is one of the most important preachings for his Buddhism.

The conclusion is as follows. It is not said that all things happen depending on other things as the conventional dominant interpretation (the dependent origination theory) asserts this preaching. It is said that the holy truth has happened through all things. Therefore, this preaching has expressed the origin theory of his Buddhism that all things are the holy truth.

はじめに

仏教の原始経典における釈尊の説法の中で最も重要なものは、四つの聖なる真理 (cattāri ariyasaccāni 四聖諦) の説法と縁起(paṭiccasamuppāda)の説法であろう。四つの聖なる真理と縁起は共に釈尊の正覚の内容をなすものとして説かれているものであり、したがって、これらについての説法は釈尊の仏教の根本説を述べているものと考えられる。これらの中でなかんずく縁起の説法は、これに依拠して釈尊の仏教の根本説を「縁起説」とする支配的・定説的な見方が生じたところのものであり、したがって、これは、特にこの縁起説の立場からは、四つの聖なる真理の説法以上に重要なものであるということになるであろう。

筆者は、縁起の説法が、四つの聖なる真理の説法と共に、釈尊の仏教にとって極めて重要なものであるということには異論はないが、しかし、これが「縁起説」を説くものであるとする見方に対しは、後述するように、強い疑念を抱いている。したがって、筆者は釈尊の縁起の説法を新たに理解し直すことの必要性を強く感じている。そして、縁起の説法を新たに理解し直すということは、とりもなおさず、根本仏教である釈尊の仏教を新たに理解し直すということを意味するであろう。以下の論述は、その一つの試みである。

* 教養部

1. 縁起の説法と差し当たりの理解

いわゆる「原始経典」は釈尊の説法の記録であるとされる。インドの南方から東南アジアに伝わったパーリ語のそれは、五つの部類に分けられており、「五部」(Panca·nikāya)と言われる。その内容は次の通りである。

長部(Dīgha·nikāya 34 経)、中部(Majjhima·nikāya 152 経)、相応部(Saṃyutta·nikāya 7,762 経)、増支部(Aṅguttara·nikāya 9,557 経)、小部(Khuddaka·nikāya 15 分)

このように、原始経典は膨大な量のものであり、それらの内のかなりのものは釈尊の説法の記録そのままではないとされている。しかし、これらの内、相応部(56のキーワードに従ってそれぞれに相応する経を集めたもの)に属する諸経典は、比較的短くかつ素朴なものであり、釈尊の説法そのままか、それに近いものとされている。その相応部経典の中で縁起の説法は「因縁相応」(Nidāna·saṃyuta)に集められており、The Pali Text Society (London) によって編集されたもの(全5巻)では、その第2巻の1～133頁を占め、93経が掲載されている。その代表的なものの一つを挙げるならば、その冒頭にあるもので、次の通りである。

「比丘達よ、何が縁起であろうか。比丘達よ、無明に縁って(avijjāpaccayā)行(saṅkhāra)はあり、行に縁って識(viññāṇa)はあり、識に縁って名色(nāmarūpa)はあり、名色に縁って六処(salāyatana)はあり、六処に縁って触(phassa)はあり、触に縁って受(vedanā)はあり、受到縁って渴愛(taṇha)はあり、渴愛に縁って取著(upādāna)はあり、取著に縁って有(bhava)はあり、有に縁って生(jāti)はあり、生に縁って老死・愁・悲・苦・憂・悩(jarāmaraṇam·soka·parideva·dukkha·domanassupāyāsā)は生起する(sambhavati)。かくの如くこの全苦蘊の起こり(samudaya)はあるのである。これが、比丘たちよ、起(samuppāda)と言われるのである。

しかるに、無明の余すところ無き離(virāga)・滅(nirodha)によって行の滅はあり、行の滅によって識の滅はあり、識の滅によって名色の滅はあり、名色の滅によって六処の滅はあり、六処の滅によって触の滅はあり、触の滅によって渴愛の滅はあり、渴愛の滅によって取著の滅はあり、取著の滅によって有の滅はあり、有の滅によって生の滅はあり、生の滅によって老死・愁・悲・苦・憂・悩は滅する。かくの如くこの全苦蘊の滅はあるのである。」[S.N.(相応部)第2巻 1-2頁]

まず、この説法は、言葉通りに理解するならば、その前半において、「何が縁起であるか」を示している。そして、その内容は、無明に縁って行はあり、行に縁って識はあり、……有によって生はあり、生によって諸々の苦が生起するというものである。

釈尊の、したがってまた仏教の、テーマは、生苦、老苦、病苦、死苦等の人間苦をいかに超克するかということであるが、釈尊は、この説法において、諸苦が直接間接のさまざまな縁によって起こることを述べ、根本の縁が無明であるということを語っていると解せられる。すなわち、縁起ということで苦の縁起が述べられていると解せられる。このことは、最後の所で、「かくの如くこの全苦蘊の生起はあるのである。」と言われていることから明らかであろう。

後半は、前半で言われたことから帰結することが述べられている。すなわち、諸苦の滅—これ

は釈尊あるいは仏教が目標とすることである—は、前半で言われた、苦の諸々の縁を、特に根本的には無明の縁を滅することによって可能になるということである。縁起の説法は差し当たりこのように理解され得るであろう。

2. 縁起の説法の問題性

以上のように説かれている縁起の説法に対しては、ただちに次のような疑問が生ずるであろう。

まず、無明に縁って行（行い・働き）があり、行に縁って識（認識）があり、識に縁って名色（心的・物的なもの）があり、・・・取着（執着）に縁って有（三世における存在）があり、有に縁って生（出生）があり、生に縁って諸苦が生起するということは事実であろうか。これは極めて疑わしいことである。例えば、無明に縁って行があるとされているが、無明によらずとも行は生起し得るから、これは少なくとも不正確な表現であろう。さらに、行に縁って識があるとされているが、これも一般的な命題としては極めて不適切である。ともあれ、それでもなおこれらを事実として正当化しようとしたら、多くのこじつけに類するような理屈も必要となるであろう。

次に、無明の滅によって行の滅があり、行の滅によって識があり、・・・・・・有の滅があり、有の滅によって生の滅があり、生の滅によって諸苦の滅があるということが言われているが、そもそも、事実のレベルで見る限り、これらの事象の滅ということはある程度得ることだろうか。これもほとんど考えられないことであろう。

以上から、釈尊の縁起の説法を単に事実のレベルのこととして理解する限り、ここでは全く荒唐無稽なことが説かれていると断ぜざるを得ないであろう。

しかし、このような釈尊の教えが当時の人々と後世の無数の人々に深甚の影響を及ぼしてきたことを考える時、この説法は現象的な苦の縁起・縁滅ということよりもっと深い別の意味を有していると考えべきであろう。それでは、この説法の真意は何であろうか。

3. 「縁起説」とする定説的理解

この説法の真意を「縁起説」として解し、これをもって仏教の根本説と見なす見方が存している。この場合、「縁起説」とは、一切のものは縁（原因、条件）によって起こっているという主張のことである。釈尊の縁起の説法をこの縁起説によって理解し、これをもって釈尊の仏教の、さらには仏教一般の根本説と見なす見方は今日仏教学ではほとんど定説になっているものである。このことを示す仏教学者の言葉を、以下、数例挙げることにする。

「十二縁起説は一切法のあり方を問題としているものである・・・十二の支分は一切法の代表として出されているのであり、従って、十二の支分の間にそれぞれ縁起の関係があることが説かれることによって、そこに、一切法の縁起が説かれたことになるのである。」（山口益、横超慧

日、安藤俊雄、船橋一哉著『仏教学序説』1961 平楽寺書店 75頁)

「仏陀の成道は縁起の自覚による、と見ることができるが、このことはすなわち、仏教の教義はすべて『縁起』という泉から流れ出た大河小河の如きものである、ということを表していると思われる。すべての原始仏教の教義がそういうことで理解できるのは勿論のこと、いわゆる小乗仏教の教義も大乘仏教の教義も、一切の仏教の教えが、すべてそういう立場からして理解せられるとき、複雑を極める仏教の教義の全体に対して、ここに一つの体系を与えることができるのではないか、と考えられる。」(同 67頁)

「『縁起』とは、申すまでもなく、釈尊の正覚の内容をいう術語である。釈尊がブッダ (Buddha 覚者) と称せられるにふさわしい者となったのは、その正覚を成就したその時からのことであり、その正覚を源泉として、そこから、仏教と称せられるもののことごとくが流れ出してくるのである。」(増谷文雄訳・解題『阿含經典』1979 筑摩書房 第1巻 82頁)

「釈尊は、実にこの『因縁の原理』、『縁起の真理』を体得せられて、ついに仏陀となったのであります。……釈尊は、これまで何人も気づかなかった『万物は因縁より生ずる』という、この永遠なる『平凡の真理』をはじめて発見されたのです。……この因縁の法を『教え』として、万人の前に説き示されたのが仏教です。因縁の教え、それが仏教です。」(高神覚昇著『般若心経講義』1967 角川文庫 45頁)

ここで、「いわゆる小乗仏教の教義も大乘仏教の教義も、一切の仏教の教えが、すべてそういう立場から」、すなわち、縁起説から、よく理解されると言われているが、特にいわゆる大乘仏教の「空」(suññatā) もここから理解される。

仏教学者の説明によると、ものが様々な縁によって起こっているということは、ものが、たまたま今、そのような縁、即ち様々な原因や条件によって、仮にそのようにあるということに過ぎず、縁が変わることによって、またそれも変化し、或いは存在しなくなるということである。すなわち、ものが縁によって起こっているということは、ものが他のものとの関係においてのみあるということであり、従って、他との関係を離れてそれ自体においては何ら固定的な存在性、或いは実体性を持たないということ、空性であるということの意味するとされる。例えば、次のように言われている。

「縁起の法は、即ち法 [=もの] が凡て相関関係の上に存して居て、その各々の法には独立孤存の実体が無いとなすのである。」(宇井伯壽著『仏教汎論』1962 岩波書店 292頁)

かくして「縁起の法」の知である智慧とは、一切のものは仮有であり、何ら実体性を持たず、無我=空であるということの知であるということになる。このことは、上に挙げた書では、次のように言われている。

「仏陀の縁起における無我の立場は、……物にせよ心にせよ、すべてのものが本来空である、そこには何らの実体性もない、これを実在する如く考えるのは真理に対する無知、すなわち無明によるのであって、このようなあやまれる思惟の成立の事情や、その恐るべき結果を徹底的に究明し、すべてのものが何ら実体性をもたぬことを覚証する智慧が必要である、と説く。この智慧を正見とか無漏智とか般若と呼ぶのである。この智慧を完成するのが仏教の最高目的である。」(上

掲「仏教学序説」7頁)

「般若波羅密多經」(paññā-pāramitā-sutta)等で説かれている大乘仏教の「空」は、このように、縁起説から理解され、物が何らの実体性をもたないこと、物が本当には実在しないことを意味しているとされる。そうとすれば、縁起説を根本として一切の物の非実在という意味の「空」を説くとされる仏教は、ニヒリズム(nihilism)を説くものであるということになるであろう。なぜなら、一切のものは虚無であるという主張はニヒリズムと言われるからである。

しかし、釈尊の仏教を、その縁起の説法に基づいて、一切は縁によって起こっているという「縁起説」であるとし、これによって仏教は一切法の非実在を説くものであるとする定説的な理解は、果たして正しいであろうか。このような仏教理解の基になっているものは、「縁起説」を説いているとする釈尊の縁起の説法の理解である。このような縁起の説法の理解は正しいであろうか。「十二縁起」と言われる縁起の説法において釈尊は果たしていわゆる「縁起説」を説いているのだろうか。もしそうであるとすれば、釈尊は、一切のものは縁によって起こっていると、直接に述べているはずであるが、そのような言説は全くないのである。したがって、この理解は極めて疑わしいものであると言わざるを得ない。

4. 釈尊による「縁起説」の否定

釈尊の縁起の説法が「縁起説」という一種の因果律を説くものであるとする、今日支配的である見方は、果たして正当なものであろうか？ 筆者は、縁起の説法のこのような理解は、釈尊の正覚の体験からはかけ離れたものであり、したがって、これから述べるように、釈尊の多くの説法によっても否定されていると考えている。その一例として、ここでは、釈尊の縁起の説法は現象の因果関係を説くものではないということを示す説法を取り上げたいと思う。これは、釈尊の縁起の説法を集めた相応部經典「因縁相応」(93 経)中の3経(第17 アチューラ、第24 諸異学、第67 葦束)に出てくるものである。

まず、第17の経では、釈尊は、縁起の説法で説かれている「苦」について、アチューラ・カッサパ(阿支羅迦葉)の問いに答える形で、「苦は自作のものではない」、「苦は他作のものではない」、「苦は自作且つ他作のものではない」、「苦は自作のものでも、他作のものでも、無因生のものでもない」、「苦は無ではない」、「苦は有ではない」と説いている。そして、次のように言っている。

「カッサパよ、彼が作し、彼が受けるということである最初に憶念された『苦は自作のものである』というこの所説は常〔見〕に陥るものである。カッサパよ、異なるものが作し異なるものが受けるということである受に重圧されて憶念された「苦は他作のものである」というこの所説は断〔見〕に陥るものである。カッサパよ、如来はこれら両極端に近づかないで中によって法を説くのである。『無明に縁って行はあり、行に縁って……』(S.N. 第2巻 19頁)

ここで、まず、苦は、「自作のもの」(sayamkatam 自らによって作し作られたもの “kata” は「作

す、作る」の意の “karoti” の過去分詞) ではないということと共に、「他作のもの」(paramkatam) ではないということが言われている。すなわち、苦は他のものを因とする果としてあるのではないということが言われているのである。このことは、第 67 の経では、老死、生、有、取着、渴愛、受、触、六処、名色、識についても言われている。ということは、釈尊の縁起の説法は事物の因果関係を説くものではないということが言われているのである。これらの説法によっていわゆる「縁起説」は否定されているのである。この説法で問題になっている苦等が「自作のもの」でも、「他作のもの」でも、「無因生のもの」(adhicca samuppannam) でも、「無」(natthi)でも、「有」(atthi)でもないということは、それらが単に現象として名指されているのではないということの意味するであろう。そうすると、それらは何を表しているのであろうか？

5. 縁起の説法の真意

(1) 何の縁起か？

縁起と訳される “paṭiccasamuppāda” は「縁って(或いは、頼って) 起こること」を意味する。この場合、何が縁って起こるのであるか？ それは、縁起の説法では、「無明に縁って行はある」以下「生に縁って苦はある」まで 11 の縁起が説かれているから、主語の位置に置かれている「行」から「苦」までの 11 種の事物であると答えられる。しかし、上掲の説法で、苦は自作のものでも、他作のものでも、無因生のものでも、無でも、有でもないということが言われた。同じことは苦以外の 10 種の事物についても言われていた。このような苦等は何であろうか？ これは単に現象としての苦等ではないであろう。何故なら現象としての苦等はその原因を他の事物に持つものであり、有になったり、無になったりもするからである。ここでの苦等が単に現象を意味するのではないとすると、それらは何であろうか？ これを示唆するものとして、「因縁相応 第 13 沙門・婆羅門」にある次の説法を挙げることができる。

「比丘達よ、老死を証智し、老死の起こりを証智し、老死の滅を証智し、老死の滅に導く道を証智し、生を・・・、有を・・・、取着を・・・、渴愛を・・・、受を・・・、触を・・・、六処を・・・、名色を・・・、識を・・・、行を証智し、行の起こりを証智し、行の滅を証智し、行の滅に導く道を証智しているいかなる沙門達或いは婆羅門達も、わが比丘達よ、沙門においては真正の沙門であり、婆羅門においては真正の婆羅門なのである。また、彼ら尊者達は沙門の義(attha)或いは婆羅門の義を現法において自ら証知し、真証し、具足して、住しているのである。」(S.N. 第 2 巻, 15 頁)

ここでは、無明以外の 11 種の事物について(ただし、「苦」は代表的な苦とされる「老死」に言い換えられている)、これらを証智する(pajānāti 現前に知るの意 < paññā 智慧)ことは、沙門等を真正の沙門等たらしめるということが言われている。さらに、これら真正の沙門等は、沙門等の存在意義であるところのものを現象において自ら証知し(abhijānāti 勝れた仕方を知るの意)、真証している(sacchikaroti 真理をさとするの意)ということが言われている。この場合、“pajānāti”、“abhijānāti”、“sacchikaroti” は、釈尊の説法においては、常に、根源的な真理を現証する仕方

知ることを表す動詞として頻繁に使用されている語である。以上から、縁起の説法において縁起の主体として言われている苦以下 11 種の事物は、釈尊の仏教が目標とするような或る根源的な真理を意味していると考えられる。

（２）縁起の主体としての「聖なる真理」

釈尊の仏教が目標とするような或る根源的な真理とは何であろうか？ これについては、釈尊のもう一つの重要な説法である「四つの聖なる真理（四聖諦）」(cattāri ariyasaccāni)の説法が説いているのである。そして、「老死を証智し、老死の起こりを証智し、老死の滅を証智し、老死の滅に導く道を証智し、・・・」と述べている上掲の縁起の説法は、実は、この四つの聖なる真理の説法の変形とも見られ得るのである。四つの聖なる真理の説法は原始経典「相応部」第 5 巻中の「真理相応」(Saccasamyutta 414-478 頁、全 131 経)に集められているが、この説法の一つの例として、その中の「第 27 真如」中の言葉を挙げる。

「比丘達よ、四つの聖なる真理がある。いかなる四つのものが、であろうか。苦という聖なる真理が、苦の起こりという聖なる真理が、苦の滅という聖なる真理が、苦の滅に導く道という聖なる真理が、である。

比丘達よ、実にこれらの四つの聖なる真理は真如(tathāni)、不離真如(avitathāni)、不異真如(anaññathāni)であり、それ故に、聖なる真理と呼ばれるのである。」(S.N. 第 5 巻 435 頁)

ここでは、苦(dukkha)、「苦の起こり（起因）」(dukkhasamudaya)、「苦の滅」(dukkhanirodha)、「苦の滅に導く道」(dukkhanirodhagāminī paṭipadā)という四つのものが、「聖なる真理」(ariyasacca)であり、「真如」(tathā)であると言われている。(注 1) さらに、原始経典では、この四つの聖なる真理の説法の変形と見なされるものとして、世界や己身や色、受、想、行、識やその他の様々な事物について、「その物」、「その物の起こり」、「その物の滅」、「その物の滅に導く道」を証智すべきことを説く説法が頻出している。このことから、四つの聖なる真理の説法は、これらの四つのものでもって一切のものを代表させていると言える。実際は、無数の聖なる真理があるということになる。かくして、この四つの聖なる真理の説法は、「一切のものは聖なる真理である」ということを説くものであると考えられる。(注 2)

それでは、苦もその他の一切のものもそれであるとされる聖なる真理とは何であろうか？ まさにこれこそが釈尊が菩提樹下の正覚(sambodhi)において体験した当のものであったと考えられる。この体験は、「この山河大地、みな仏性海なり」(道元『正法眼蔵』仏性の巻 仏性＝真理)といった体験であり、自分も他の一切のものも聖なる真理であるという体験である。この真理は、一切の事物がまさにそれであるところの一真実であるが、しかし、あれこれの事物ではなく、一切の事物を貫き越えているものである。したがって、これは、特に原始経典では、事物を表す言葉に否定語を加えて表わされている。釈尊の説法はまさにこのような真理を説くものであるから、経典の到る処にこのような表現が見られる。次の真理についての説法もその一例である。

「比丘達よ、汝達に真理(sacca)と真理に導く道(saccagāmiṇī magga)とを説こう。これを聴け。

では、比丘達よ、いかなるものが真理であろうか。比丘達よ、貪欲の滅尽、瞋恚の滅尽、愚痴の滅尽、これが、比丘達よ、真理と言われるのである。では、比丘達よ、いかなるものが真理に導く道であろうか。止 (samatho 寂止、寂滅)、これが、比丘達よ、真理に導く道である。」(S.N. 第4巻 369頁、無為相応 第15) (注3)

ここでは、真理は貪欲、瞋恚、愚痴という三つの代表的な煩惱の滅尽として表わされている。さらにまた、このような真理に至る道は、心を一つのことに止め、集中することである「止」であるとされている。この「止」は「三昧」(samādhi 定)の別名である。この真理は坐禅等の三昧行によって到達されると説かれているのである。

真理が否定的な仕方で述べられている例をもう一つ挙げる。これは、真理の別名である「涅槃」(nibbāna)について述べているものである。

「比丘たちよ、このような処がある。そこは地もなく、水もなく、火もなく、風もなく、空無辺処もなく、識無辺処もなく、無所有処もなく、非想非非想処もなく、この世も他の世もなく、日月の両者もない。それを私は、比丘たちよ、来とも言わず、往とも言わず、没とも言わず、再生とも言わない。これこそはまさに住なく、転起なく、縁境なき処であり、これこそ苦の終わりなのである。」[小部 自説経(Udāna) 80頁]

ここで、真理は、苦に関して、「苦の終わり」(dukkhassanta)と表現されているが、多くは「苦の滅」(dukkhanirodha)と表現され、時には「苦の超越」(dukkhassa atikkama)と表現されることもある。しかし、真理は苦や地、水、火、風やその他一切の事物とは別にあるものではなく、むしろそれら一切の事物としてあり、一切の事物は本来それであるといったものである。

ともあれ、縁起の説法において縁起の主体として挙げられている苦から行までの11種の事物はこのような聖なる真理を意味していると解せられる。すなわち、縁起の主体はこの聖なる真理であり、聖なる真理が縁って起こるのであると考えられる。

(3) 縁起の説法は何を説くものか?

釈尊の縁起の説法において無明以外の11種の事物は聖なる真理を意味しているとするならば、この説法は何を説くものであろうか? このことを見るために、「因縁相応 第20縁(paccayo)」中の説法の言葉を取り上げる。

「比丘達よ、何が縁起であろうか。比丘達よ、生に縁って老死はある。如来達が世に出ても、如来達が世に出なくても、その実性、法住性、法決定性、此縁性は住立しているのである。それを如来は現等覚し、現観し、現等覚し現観しおわって宣説し、教示し、知らしめ、提示し、解明し、分別し、明瞭にし、そして『汝達よ、見よ』と言うのである。

比丘達よ、生に縁って老死はある。比丘達よ、有に縁って生はある。……比丘達よ、無明に縁って行はある。如来達が世に出ても、如来達が世に出なくても、その実性、法住性、法決定性、此縁性は住立しているのである。それを如来は現等覚し、現観し、現等覚し現観しおわって宣説し、教示し、知らしめ、提示し、解明し、分別し、明瞭にし、そして『汝達よ、見よ』と

言うのである。

比丘達よ、無明に縁って行はある。比丘達よ、かく、そこに存する真如、不離真如、不異真如、此縁性、これが、比丘達よ、縁起と言われるのである。」(S.N. 第2巻 25-6頁)

この説法では「生に縁って老死はある」等の縁起が説かれているが、そこに存するという或る根源的なものが言われており、それが次の各語でもって名指されている。

・「実性」(ジッソウ dhātu 一般的意味；根本的実体) ・「法住性」[dhammaṭṭhitatā 物において住している物の本性] ・「法決定性」(dhammaniyāmatā 物において定まり不動である物の本性)、・「此縁性」(idappaccayatā, この縁の本性) ・「真如」(tathatā) ・「不離真如」(avitathatā) ・「不異真如」(anaññathatā)

そして、これら真如等を指して、「これが縁起と言われるのである」とされている。ここに出てくる「真如」は「真理」の別名である。したがって、縁起はまさに真理であるということが言われているのである。よって、この説法によっても、釈尊によって説かれる縁起は、事物の縁起ではなくて、真理の縁起であるということがわかる。しかも、真理の縁起は真理そのもののことなのである。「縁起」すなわち“paṭiccasamuppāda”は、「・・・に縁って起こること」を意味するのであった。釈尊によって説かれる縁起は、真理が・・・に縁って起こることなのである。

さらに、この説法では、「比丘達よ、何が縁起であろうか。比丘達よ、生に縁って老死はある。」と言われていた。すなわち、「生に縁って老死はある」、これが縁起であると言われている。そして、ここで主語の位置にある「老死」は、上に述べてきたことから、真理を意味していると解せられる。よって、この言葉は「生に縁って真理はある」ということを意味することになる。同様に、「有に縁って生はある」以下も、「有に縁って真理はある」、「取著に縁って真理はある」、・・・・「行に縁って真理はある」、「無明に縁って真理はある」ということを意味することになる。そして、「・・・に縁って真理がある」は、「・・・に縁って真理が起こる」と同じことを表していると解することができるであろう。

以上から、縁起の説法の前半は、これらをまとめて表現するならば、「無明、行、識、名色、六処、触、受、渴愛、取著、有、生に縁って聖なる真理はある（或いは、起こる）」ということを行っていることになる。そして、これは以下のようなことを言っているものと解せられる。

聖なる真理は、一切の事物を貫き越えているものであるが、しかし、それらと別なものではなく、むしろ、それは、一切の事物として現成しているものである。すなわち、聖なる真理は一切の事物に縁ってある（或いは、起こる）ものである。

ここで、最後に、縁起の説法の後半部分についても簡単に触れる。そこでは、「無明の余すところ無き離・滅によって行の滅はあり、行の滅によって識の滅はあり、・・・・有の滅によって生の滅はあり、生の滅によって老死・愁・悲・苦・憂・悩は滅する。」と説かれていた。この場合も、主語の位置にある「行の滅」、「識の滅」、・・・・「生の滅」、「苦の滅」は「聖なる真理」を表しているものと見なされる。したがって、この説法の後半部分は、「無明の滅、行の滅、識の滅、名色の滅、六処の滅、触の滅、受の滅、渴愛の滅、取著の滅、有の滅、生の滅に縁って聖な

る真理はある（或いは、起こる）」ということを言っているものと解せられる。すなわち、前半部分とほとんど同様なことを言っているものと考えられる。一切の事物は起こり滅するものであるが、そのような事物の起・滅に縁って聖なる真理はある（或いは、起こる）のである。

こうして、この縁起の説法は、「四つの聖なる真理」の説法と同様に、しかしそれとは異なる仕方、「一切は聖なる真理の現われである」、或いは、「一切は聖なる真理である」ということを説いているものであると解せられる。そして、これが釈尊の仏教の根本説であると考えられる。

(注1) 苦の超克を目指す仏教にとって関心の的であるこれら四つのものが、さらには一切のものが、聖なる真理であるということは、仏教の根底にある根本経験から見られるならば、全く当然なことであろう。しかし、縁起説を取る立場からはこれは全く理解できないことであろう。したがって、この四つの聖なる真理（四聖諦）は、通常、次の説明事例に見られるように、「・・・は・・・である」というような命題の真理として「合理的に」理解されているのである。「神聖な真理が四つあるから合せて四聖諦という。すなわち、第一には、迷いの生にあつてはすべては苦しみである、という真理で、これを苦聖諦という。第二には、その苦しみを集め起こすところの原因は無明（仏教真理の無自覚）と渴愛（求めて飽くなき我欲）とである、という真理で、これを苦集聖諦という。第三には、その苦しみの滅した境地こそがさとりの世界である、という真理で、これを苦滅聖諦という。第四には、そのさとりの世界に至るのには八聖道に従って正しい生活をしなければならない、という真理で、これを苦滅道聖諦という。」（上掲『仏教学序説』 103 頁）

(注2) 「四つの聖なる真理」については、筆者はすでに以前に次の拙著においてその究明を試みている。

・「根本仏教における智慧（一）」（『福井工業大学研究紀要 第二部』第20号 1990.7）

・「同（二）」（同 第21号 1991.3） ・「同（三）」（第23号 1993.3）

(注3) この経が属している「相应部經典」の「無為相应」には、「真理」を別な言葉で言い換えただけの沢山の経が出てくる。その言い換えられた様々な言葉（32語）は、「真理」と同じく、仏教が説く根源的な或るものを表しているものである。その一部を挙げるが、ここでも否定的な表現が多くみられる。

「無為」(asaṅkhata)、「無漏」(anāsava)、「不老」(ajajjara)、「無迷執」(nippapa)、「不死」(amata)、「愛滅」(taṇhakkhaya)、「涅槃」(nibbāna)、「離貪」(virāga)、「無執着」(anālaya)「究極」(anta)、「彼岸」(pāra)、「堅牢」(dhuva)、「寂靜」(santa)、「清淨」(suddhi)、「解脱」(mutti)、「洲」(dīpa)、「歸依所」(saraṇa)、「到彼岸」(parāyaṇa)

参考文献

- ① “SAMVUTTA-NIKĀYA” Vol.1～5, The Pali Text Society (London), 1970～1976
- ② “UDĀNA”, The Pali Text Society (London), 1982
- ③ 『仏教学序説』 山口益、横超慧日、安藤俊雄、船橋一哉著 1961 平楽寺書店
- ④ 『阿含經典』(全6巻) 増谷文雄訳・解題 1979 筑摩書房
- ⑤ 『般若心経講義』 高神覚昇著 1967 角川文庫
- ⑥ 『仏教汎論』 宇井伯壽著 1962 岩波書店

(平成20年3月31日受理)